



京大広報

No. 516

1997. 8

目次

〈大学の動き〉

井村総長のアメリカ合衆国訪問289

名誉教授称号授与式289

平成9年度国立学校施設整備事業の決定289

「副学長制の設置」および「学生部の事務局一元化」についての総長の説明会289

〈部局の動き〉

総合情報メディアセンターオープンスペースラボの試行利用290

〈日誌〉291

〈荣誉〉

北川善太郎名誉教授がオイゲン・イルゼサイボルト賞を受賞291

〈訃報〉291

〈紹介〉

総合博物館292

〈随想〉

国際文化交流の現状について考える
名誉教授 石井 米雄294

〈京都大学の百年(第26回)〉

「京都大学」設置の構想と九鬼隆一295

〈洛書〉

京都大学で生まれた速記法 下谷 政弘296



第36回国立七大学総合体育大会の壮行会

—関連記事本文299ページ—

〈資料〉

平成8年度歳入・歳出決算額及び
対前年度比較調297

〈公開講座〉

第3回総合人間学部公開講座
「国際化・国際交流・比較文化」
—歴史と現代—298

〈話題〉

ふるさと切手「京都大学時計台」の発行に
ついて299

第36回国立七大学総合体育大会の壮行会に
ついて299

大学の動き

井村総長のアメリカ合衆国訪問

井村総長は、7月15日からアメリカ合衆国（メリーランド州ベセスダ市）に出張し、7月20日に帰国した。

本出張では、日米医学協力委員会に出席し、また

アメリカ合衆国側委員と高等教育・学術研究機関における医学教育・研究の現状等について、意見交換を行った。

名誉教授称号授与式

6月23日（月）午前9時30分から、総長室において総長特別補佐、総合人間学部長出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、生越久靖元教授（大学

院工学研究科）および児嶋眞平元教授（総合人間学部）に称号が授与された。

平成9年度国立学校施設整備事業の決定

平成9年度国立学校施設整備事業のうち、本学関係分は次表のとおりである。

事業名	構造・階	面積	備考
医学部附属病院外来診療棟 (外来棟第Ⅱ期)	SR5-2	29,080m ²	(凡例) SRは鉄骨鉄筋コンクリート構造 Rは鉄筋コンクリート構造 5-2は地上5階、地下2階
宇治団地国際交流会館	R4, R5	1,520m ²	
生態学研究センター研究実験棟	R3	2,140m ²	
化学研究所研究実験棟	R5, SR1	3,690m ²	
工学部校舎	SR8-1	4,510m ²	

上記事業の実施に際し、工事の進捗について関連部局のご協力をお願いします。

(施設部)

「副学長制の設置」および「学生部の事務局一元化」についての総長の説明会

「副学長制の設置および学生部の事務局一元化」（京大広報1997.7 No.515参照）についての総長の説明会が、平成9年7月11日（金）午後4時から9時の間、法経第7教室において行われた。

当日は、井村総長のほか、瀬地山総長特別補佐、宮崎学生部長が同席し、学生や教職員約500名が出席した。総長の説明の後、質問があり、それに対して総長が追加説明を行った。

(学生部)

部局の動き

総合情報メディアセンターオープンスペースラボの試行利用

総合情報メディアセンターでは、来年2月から楽友会館の一部を借用し、オープンスペースラボ(OSL)として運用する予定です。OSLは、学生や教官がセンターの計算機環境を自由に使って自学自習する場です。これまではセンターを利用する授業に登録した学生のみが、授業担当教官の指導の下でセンターの計算機を使う利用形態で、年間のべ1万人の利用者登録がありました。来年からのOSLでは本学の構成員であれば誰でもセンターの計算機を利用できる予定で、本学の学部と医療技術短期大学の学生および大学院生のすべてと教職員などを含め2万5千人の利用登録を見込んでいます。

センターでは、このような授業担当教官の指導を離れた利用形態でおこりうる問題点を洗い出すため、本年6月より来年1月下旬まで、演習室の空き時間を利用してOSLを試行しています。現在、533名が試行に参加しており、その大部分は学部と医療

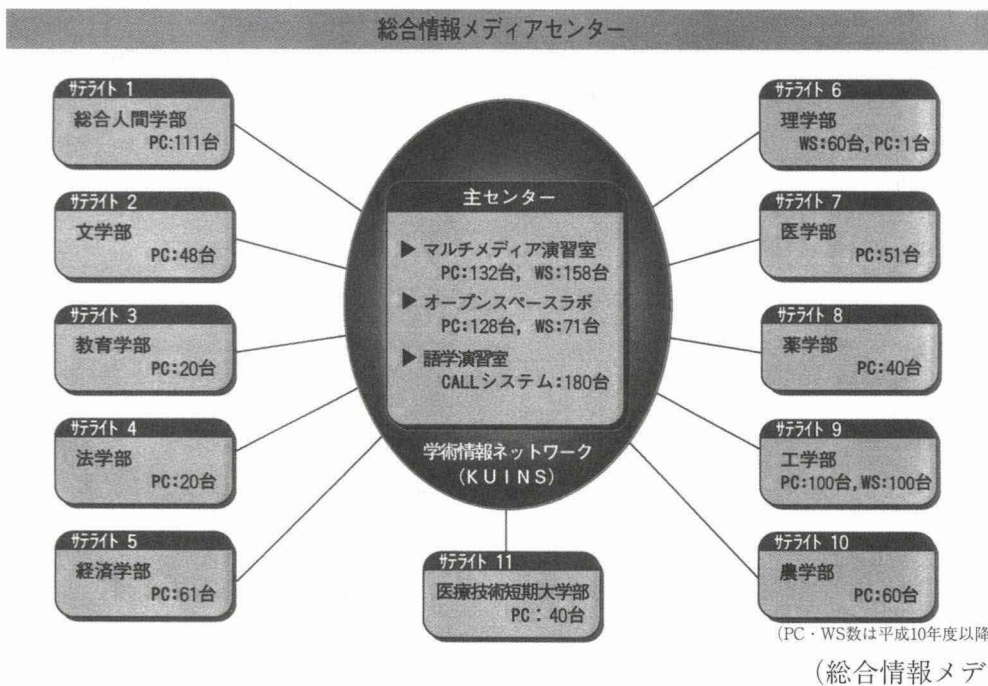
技術短期大学の学生です。OSL試行の参加者は、センターの演習室が授業で専有されていない時間に限り、電子メールWWW(World Wide Web)のホームページ閲覧など従来のセンター利用者に提供している内容のすべてを利用できます。それ以外に、ティーチングアシスタントによる利用相談を平日の午前9時から午後6時まで受け付けています。また、自宅からの電話回線による24時間運用のPPP(Point-to-Point Protocol)接続を準備しています。これを使えば、センターまで行かなくても、簡単な操作で電子メールやWWWを読み書きできます。なお、初心者向けの講習会をこれまでに5回開催しました。講習会は今後も継続し、内容もより高度にしていく予定です。加えて、OSL試行利用者心得を作成し、ネットワーク時代における計算機利用のルール明確化をはかっていきます。OSLに関連する調査も計画しています。

〔システム構成〕

総合情報メディアセンターは、主センターおよび各学部管理の建物内に設けられている、サテライト教室・演習室で構成されます。

主センターにはマルチメディア演習室、オープンスペースラボ、語学演習室があり、主として情報処理教育と語学教育に使用される。また、サテライト

は主として各学部の専門教育に利用される。なお、平成10年1月までは、旧情報処理教育センターの情報機器を継続利用し、平成10年2月にはPC・WSのレンタル機器を中心に新システムに移行する。平成12年度にセンターの建物が完成し、本格的サービスを開始する予定である。



日誌

1997年6月1日～6月30日

- 6月4日 外国人留学生歓迎パーティー
- 6日 フランス共和国 国立保健医学研究所 C.GRISCELLI所長他9名来学，総長及び関係教官と懇談
- ク 人権に関する研修会
- 9日 総長，ミネソタ大学訪問及び内分泌学会出席のためアメリカ合衆国を訪問（15日まで）
- 18日 中華人民共和国 中国河南省科学院 陳副院長他4名来学，総長及び関係教官と懇談
- 23日 イスラエル国 MOSHE BEN-YACOV大使他3名来学，総長及び関係教官と懇談
- ク 名誉教授称号授与式
- ク 永年勤続者表彰式
- 24日 評議会
- 25日 国際交流委員会
- ク 国際交流会館委員会
- ク 建築委員会
- 26日 総長，職員組合との交渉
- 28日 名誉教授懇談会
- 30日 核燃料物質管理委員会

栄誉

北川善太郎名誉教授がオイゲン・イルゼ サイボルト賞を受賞



このたび、北川善太郎名誉教授がオイゲン・イルゼ サイボルト賞（Eugen und Ilse Seibold-Preis）を受賞された。

本賞は、ドイツの海洋地質学者オイゲン・サイボルト教授が、旭硝子財団から授与されたブルー・プラネット賞の賞金の一部を、その夫人イルゼ・サイボルト博士とともにドイツ学術団体（Deutsche Forschungsgemeinschaft）に寄贈され、これを基金として2年ごとに、日独両国の相互理解に寄与した研究者に授与されるものである。本年は、その第1回目にあたり、北川善太郎名誉教授が、日本学のブルーノ・レヴィン名誉教授とともに、本年3月25日本賞を受賞された。

北川名誉教授は、昭和36年3月京都大学助手に採用され、同37年5月同助教授、同45年7月同教授に昇任し、平成8年3月に退官されるまで、34年間にわたり本研究科において民事法講座を担当された。この間、同教授は、民法、消費者法、知的財産法などにおいて先端的な研究を続けてこられたかたわら、ことにドイツ連邦共和国との学術交流にも力をそそがれ、昭和49年にミュンヘン大学、同63年にマールブルク大学にて客員教授を務めたほか、平成元年にはマールブルク大学より名誉博士号を授与されている。こうした同教授の業績は高く評価され、ドイツ連邦共和国より、昭和59年にはフォン・シーボルト賞、平成3年にはドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章を授与されている。

（大学院法学研究科）

訃報

片岡 壽子 保健診療所検査室文部技官

保健診療所検査室文部技官 片岡壽子氏は、6月16日逝去された。享年58。

同氏は、昭和39年本学医学部附属病院に就職、同54年保健診療所に配置換となり、臨床検査技師として医療業務一筋に尽力された。また、平成6年には、

京都大学永年勤続者表彰（30年勤続）を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（保健診療所）

紹介

総合博物館

京都大学には、過去100年間に収集・研究された250万点にも及ぶ学術標本資料・教育資料が保存されている。その内容は文化史・自然史・技術史にわたる広範かつ多彩なもので、国宝・重要文化財やそれに準ずる文化財、あるいは生物や化石の新種の戸籍原簿とも言うべきタイプ標本など、国際的にも貴重な学術標本資料が多数含まれている。総合博物館は、これらの資料を集中的に保管・管理し、広く学内外の先端研究・教育への活用を促進し、その成果を内外に発信することを目的として設置された。

大学が十全な研究・教育活動を行なうためには、その拠点として、学術標本を収蔵・管理するための施設が必要である。本学ではこのような考えに基づき、大学創立当初、学術標本資料の収集の開始と同時に大学博物館の設置も構想された。そして文化史関係資料に関しては、すでに大正3年(1914)文学部に陳列館が竣工、そして昭和30年(1955)には、文部省による博物館相当施設の指定を受けている。陳列館は同34年には博物館と改称、同61年(1986)には、新館が竣成した。この文学部博物館では、春秋の展示公開、収蔵品目録の刊行など、活発な活動が続けられてきた。このような実績が、総合博物館設置への道を大きく切り開いた要因の一つとなった。

一方、理学部・農学部・教養部などでも、開設以来たゆみなく収集され、研究に用いられてきた学術標本資料が膨大な数量となり、その十分な管理と活用の必要性が叫ばれるようになり、同61年(1986)三学部合同調査委員会が発足した。そして、総合的調査の結果学術的価値の高い自然史標本資料が多数存在することが判明する一方、劣悪な状態で保管されているものも多いことも明らかとなり、自然史博物館の建設が緊急課題となってきた。そして、既存の文学部博物館と新設の自然史博物館とを統合した「京都大学総合博物館」案が構想され、やがて、工学部・農学部などに歴史的価値の高い技術史関係資料のコレクションが多数存在することが確認されるに至って、本学が収蔵する250万点以上の学術標本資料の全貌が明らかとなり、これらを収蔵・管理・活用する総合博物館の設置は全学的な願いとなり、ついに平成9年4月1日、その設置が認められるこ

ととなった。

総合博物館は、学内外に対して、以下のような重要な役割を担っている。

- 1) 京都大学が収蔵する250万点の人類の財産とも言うべき学術標本資料の保全
- 2) 学術資料を使った学内外における先端的学術研究・教育の活用を通じた我が国の科学技術レベル水準の維持・向上
- 3) 展示や標本資料を実物教材とした公開講座、学芸員再教育などを通じた生涯学習の実施・支援
- 4) 学術資料情報、研究・教育成果のインターネットなどによる公開を通じた京都大学の知的生産の成果の世界へ向けた発信

これらの任務をもっとも効率的に果たすために、館長のもとに、資料基礎調査系、資料開発系、情報発信系の三部門(それぞれ教授1, 助教授1, 助手1のスタッフを配置)が置かれ、5名の事務官の強力なバックアップの下、相互に密接な連携を保ちつつ業務を開始した。

それぞれの系の役割は次のようなものである。

- (1) 資料基礎調査系：一次資料の保存・管理、統一的分類・登録、およびその利用に関する基礎的研究
- (2) 資料開発系：一次資料から学術情報を引き出すための理論と技術の開発・研究
- (3) 情報発信系：一次資料に関する情報のデータベース化と情報交換のためのネットワークの構築

総合博物館についてのより詳しい情報を知りたい方は、ホームページで発信している(<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>)ので、アクセスしていただきたい。

総合博物館では、自然史・技術史関連の学術標本資料の収蔵、展示のための新館(現在の総合博物館の南側を予定)を計画中である。新館には、各系の業務に必要な機器設備、世界に向けた情報発信機能も備える予定である。折しも京都大学100周年の年に発足した総合博物館。新館の建設によって21世紀における京都大学の発展の強固な橋頭堡の一つを創るべく、目下新しい機能の新館建設を骨子とした平成10年度概算要求の作成に全力を注いでいるところ

である。

次号では、自然史・技術史分野の資料を中心に紹介したいと考えています。(文学部博物館の紹介は、

「京大広報」、1987年11月1日号外に掲載しています。)

総合博物館の役割

人類の財産としての学術標本資料の保全

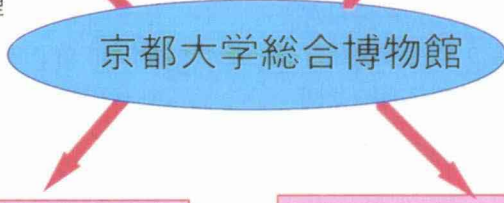


250万点に上る学術標本資料の体系的収蔵・登録・管理

日本の科学技術水準レベルの維持・向上



学術資料を使った先端研究・教育の支援

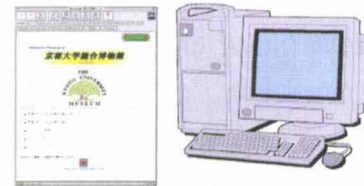


生涯学習の実施・支援

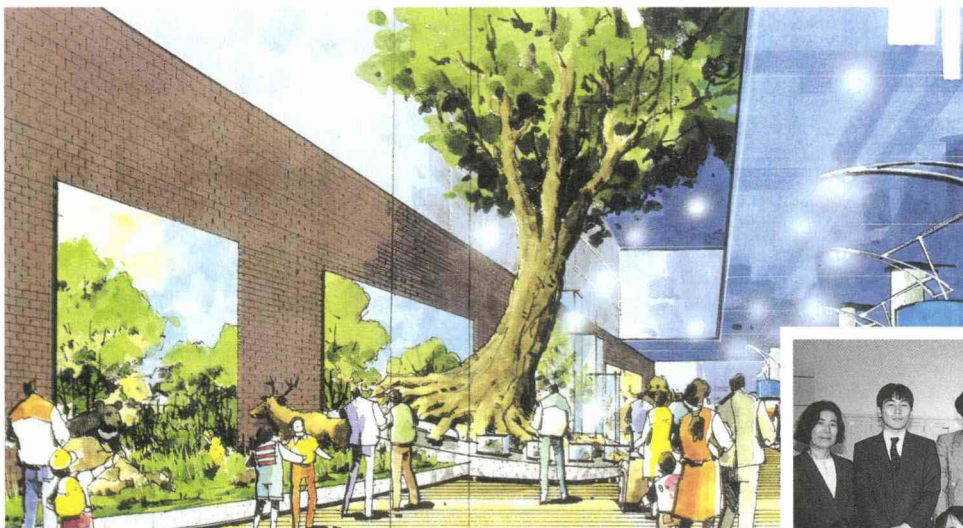


生涯学習教育の実施と、学芸員再教育を通じたその支援

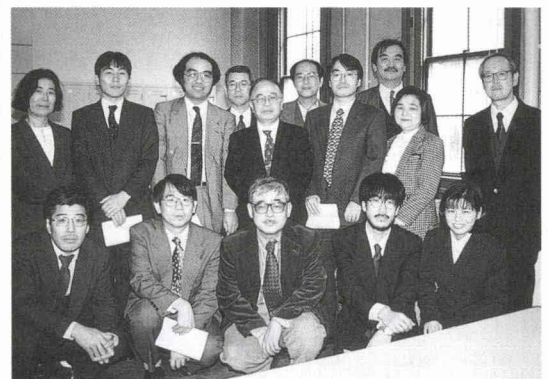
京大の知的生産の成果の世界へ向けた発信



学術資料情報、研究・教育成果の世界へ向けた発信



総合博物館新館展示室イメージ図



総合博物館スタッフ

(総合博物館)

随想

国際文化交流の現状について考える

名誉教授 石井 米雄

経済人類学者カール・ポランニーは、遠隔地交易に関する或る論稿のなかで「ファクトール」(factor)と「メルカトール」(mercator)という二つの人間類型を論じている。「ファクトール」の典型例は、たとえばオランダ東インド会社の商館員で



ある。かれらの生活の目標は、下級商館員から上級商館員に昇級し、できうべくんばしかるべき港におかれた会社の商館長になることだった。行動を動機づける要因は会社内における地位である(status motive)。これに対して「メルカトール」型人間の目標は、交易によってすこしでも多くの利潤を得ることにある。肩書きはかれらの問題ではない。巨大な利潤の獲得こそがかれらの生きがいであり、人生の目標だったのである(profit motive)。

ポランニーの提出したこれらふたつの人間類型は、交易史研究の分野を越えて、はるかにおおきな射程をもつ分析概念であるように思われる。いつぞやテレビで、新卒の新入社員をあつめて人生の目標を尋ねた番組を見たことがある。正確な数字は忘れてしまったが、出席者のほとんど全員がすくなくとも部長となること、できうべくんば重役に出世することを夢見ているようだった。社長になるつもりだと言った新入社員の数が、10%くらいはあったように記憶している。司会者が、こればかりは統計的に見て無理な話のようですね、と言ったとき、出席した新入社員のもらした失笑が印象的だった。この番組は、期せずしてかれらの全員が典型的な「ファクトール」型人間であることを示してくれた訳である。

都市に住む近代人の多くは、おそらく何らかの組織に属しているに違いない。それが会社であれば、一日も早く課長になりたいと思ひ、かれらの妻もまた人よりすこしでも早く部長夫人になる日を待ち望む。これが組織人間の自然の姿であろう。その結果、だれしものがスタッフであることをいさぎよしとせず、ラインの一員になりたいと思ひ。しかしこの考えに批判の余地はないのだろうか。先端技術を生み

出すすぐれた頭脳は、かならずしも人間集団を統括する能力とイコールではあるまい。組織のなかで「一匹オオカミ」と呼ばれるような人間、地位には興味をもたず、ひたすら1グラムでも軽い部品の完成に情熱を傾ける人間、つまりポランニーの言う「メルカトール」型人間を正当に評価することが、いま求められているのではあるまいか。

このことを、私は、巷間かまびすしく議論される「国際文化交流」について考えるのである。ある国際文化交流団体の幹部と話をして意外に感じたのだが、文化交流に一生をささげようと志を立てたはずの若者もまた、「課長」や「部長」になることを目標としがちなのだという。理由を尋ねると、「国際文化交流」の実務では「なにに課長」や「なにに部長」があつて初めて仕事ができるのだという答がかえってきた。

高度な文化は「有名の個人」によって創造される。とすれば文化の交流もまた「有名の個人と個人の間」によって行われるはずである。日本に招かれた外国の詩人は、某々文化財団の理事長や受入課長と話をするよりも、世界の文学界の事情に精通したその財団のプログラム・スペシャリスト某々氏と話をすることがはるかに楽しくかつ有益であろう。しかし残念ながら現実はこの逆の場合の方が多い。そもそも文化の交流を「無名性の原理」の卓越する組織が行うこと自体に無理があるのだ。しかし組織がなければ物が動かぬのが現実であれば、それもやむを得まい。ただこうした二律背反の存在を自覚してこれを克服しようとする努力を続けられない限り、真の意味での国際文化交流はとても達成されそうにないように思ふのだがいかがなものか。

(いしい よねお 元東南アジア研究センター所長
平成2年退官 専門は東洋史学)

京都大学の百年（第26回）

「京都大学」設置の構想と九鬼隆一

京都に帝国大学が設置されるよりもかなり以前から、東京大学（1877年創立、1886年より帝国大学）に次いで関西に第二の大学を求める意見はいくつか表明されていた。帝国議会で提案されたこともあれば、教育者の集会で議論されたこともあった。それらの意見のなかで、「京都大学」という名称が使われた最初は、1891（明治24）年8月に作成された九鬼隆一の「京都大学条例」（宮津市の京都府立丹後郷土資料館に保管）だと考えられている。

九鬼は1852年生まれ、東京美術学校（現在の東京芸術大学の一部）や帝国博物館（のち皇室博物館、現在の東京国立博物館）の設立に尽力し、また古社寺保存法（現在の文化財保護法）の制定にも活躍するなど美術行政家として有名である。のち京都帝国大学文学部で哲学を講じた九鬼周造は彼の子息である。

九鬼の「京都大学条例」は全42条の条文からなり、九鬼の考えた「京都大学」なるものの規則を定めている。第1条には、いきなり「京都大学ハ天皇陛下ノ特別保護ノ下ニ立チ」とあり驚かされるが、子細に読むと、以下のようにいわゆる大学自治を念頭に置いて作られたものであることが分かる。例えば、①経費は利子収入・授業料・皇室からの保護金で賄うとあり、国家財政からの自主権を保証しており、予算規模が拡大しなければ議会の協賛を求める必要はないとして議会による掣肘も限定的なものにしている、②当時の法令に明記されていたような文部大臣の大学への統制には一切ふれていない、③教授は刑事罰か懲戒を受けないかぎり免職されることはない、というような具合である。この2年ほど前に東京の帝国大学の教官からも、管理職者を投票で選ぶなど当時としては際立って自治的な大学改革案が提出されており、九鬼もその影響を受けたことが考えられる。ただ、このようなラディカルな大学改革案は、もちろん実現することはなかったし、そもそも公の場でどれだけ取り上げられたかも残念ながら証拠がない。いずれにしろ、九鬼はこの翌年の1892年の関西地方教育者大集会なる集会でも「京都大学設立考案」という演説を行っており、当時「京都大学」設置を求める有力者であったことは間違いない。

実は、九鬼の京都に大学を設置したいという希望

はもっと時期を遡ることが可能なようだ。1886年9月29日付の『日出新聞』（現在の『京都新聞』の前身）に「文部省に於ては曾て京都府下山城国に大学校を建設せんとて既に其位置を同国紀伊郡堀内村旧桃山に相し文部少輔^{しやうぶ}たりし九鬼隆一君が京都まで出張して実地の調査等もありたりしが」という記事が見える。九鬼が文部少輔だったのは1880年2月から1884年12月までであり、もし新聞記事を信じるとすれば文部省はこの間のどこかの時期に「大学校」を京都につくる構想を持っていたことになる。文部少輔という役職は、文部卿（大臣に相当）一大輔（次官に相当）に次ぐ三番目にあたるが、当時文部省には大輔は不在で実質的に九鬼が省の実権を握っていたという。その九鬼が、京都に視察に来ているということは、この時期文部省では京都に二番目の大学を作るという構想がかなり具体化していたと推測できる。

ところが、九鬼は中央政界の人物のなかでは岩倉具視に近かったといわれ、岩倉の死（1883年）後文部省における影響力を失い、1885年には公使としてアメリカに去っていく。帰国後も文部省には戻らずに宮内省に属する帝国博物館に入り、外から文部行政を論じるようになる。九鬼の文部省退任とともに中央における京都への大学設置運動は下火になるが、九鬼個人はずっと京都に大学を、と思いつづけていて本稿で紹介した「京都大学条例」となったものであろう。しかし、九鬼の議論はもはや在野のものであり、日清戦争後に実際に京大が設置されるにあたっては、一部の新聞に初代総長の候補に擬せられもしたが、任命されるはずもなかった。最も早い時期から「京都大学」設置を求めていた九鬼は、京大創立にどのような気持ちを持ったのだろうか。

（百年史編集史料室）

洛書

京都大学で生まれた速記法

下谷 政弘

昨年4月、京都大学に速記研究会という小さな学生サークルを作った。「速記」というのは特殊な符号(速記文字)を駆使して人の話をそのまま筆記する技能をいう。習得にはハードな訓練が必要である。続かずに途中で挫折する者も多い。しかし、手がけてみてその魅力に取り憑かれる者も少なくない。手前味噌になるが、小生もかつて高校時代を速記に狂って過ごした一人。今回、ある経緯があって学生を集めサークルを結成する羽目になったのである。「このハイテク時代に何を今さら」と周りから非難され、「学生は集まらないよ」とも揶揄された。が、実際には4名の物好きな学生たちが集まってきた。実に京都大学というのはいはな所である。

速記にはいろんな流派がある。京都大学速記研究会は中根式。小生が高校時代に習得したのが同式だったからである。そもそも、中根式速記の誕生が大阪毎日新聞紙上に掲載されたのは大正3年5月のこと。そして、その創始者こそ、当時、京都帝国大学の理工科大学土木科の一学生だった中根正親(1890~1984年)であった。貧乏学生が速記の新方式を作りだしたと報道されたのである。正親が三高生時代に速記というものの存在を知ったのは偶然であった。彼はその後、いろんな既存流派の方式を検討し

てみた。しかし、結局は「日本におけるあらゆる方式の不信任」に立ちいたる。そして自ら「日本語の本質に最も適応する速記法則を編み出すことに没頭し、ついに成功した(同「創案当時の思い出」)。以来、中根式速記は、令弟正雄の献身的な普及活動もあって、日本の速記界で大きな地歩を占めるようになったのである。

しかし、今日は電子によって音声そのまま文章化しようという時代である。そんな時節に手書き速記のサークルなどに若者が集まるはずもない。「講義ノートが楽に取れますよ」と、昨春にはいろんな工夫をこらした。誰にも読めない日記を書きたい人、暗号・符号に関心のある者、日本語について考えている学生諸君、集まれ!と。勧誘のターゲットを文系学生に絞ったのは小生の昔の体験から。宣伝ビラも、だから文系の建物にしか貼りださなかった。ところが、なんと、速記研究会に集まってきた4名のうち3名が工学部生であった。これも何かの因縁か。

今、速記研究会では、秋の百周年記念の総長挨拶を書きとれるように、と練習を重ねている。

(しもたに まさひろ 大学院経済学研究科教授)

(本文の冒頭段落を速記文字で書いたもの)

資料

平成8年度歳入・歳出決算額及び対前年度比較調

(文部省所管国立学校特別会計)

区 分	平成8年度決算額	平成7年度決算額	比較増△減額	増△減率
歳 入	円	円	円	%
附属病院収入	17,790,375,829	16,641,935,213	1,148,440,616	6.90
授業料及入学検定料	9,688,793,300	9,079,692,550	609,100,750	6.71
学校財産処分収入	90,593,940	43,700,000	46,893,940	107.31
雑収入	5,629,902,326	4,495,330,213	1,134,572,113	25.24
合 計	33,199,665,395	30,260,657,976	2,939,007,419	9.71
歳 出				
国立学校	53,153,170,478	51,578,584,373	1,574,586,105	3.05
人件費	33,158,833,614	32,255,840,015	902,993,599	2.80
物件費	19,994,336,864	19,322,744,358	671,592,506	3.48
大学附属病院	20,815,258,972	20,389,403,381	425,855,591	2.09
人件費	8,830,933,847	8,652,703,497	178,230,350	2.06
物件費	11,984,325,125	11,736,699,884	247,625,241	2.11
研究所	14,830,761,390	14,573,881,037	256,880,353	1.76
人件費	8,715,878,065	8,563,097,881	152,780,184	1.78
物件費	6,114,883,325	6,010,783,156	104,100,169	1.73
施設整備費				
物件費	11,347,505,300	20,097,217,500	▲8,749,712,200	▲43.54
特別施設整備費				
物件費	573,628,000	1,410,720,000	▲837,092,000	▲59.34
合 計	100,720,324,140	108,049,806,291	▲7,329,482,151	▲6.78
人件費	50,705,645,526	49,471,641,393	1,234,004,133	2.49
物件費	50,014,678,614	58,578,164,898	▲8,563,486,284	▲14.62

公開講座

第 3 回 総合人間学部 公開講座 「国際化・国際交流・比較文化」 — 歴史と現代 —

本学部では、来る9月1日（月）から9月3日（水）の3日間、広く一般市民の方を対象とする第3回京都大学総合人間学部公開講座「国際化・国際交流・比較文化」—歴史と現代—を下記のとおり開催します。

記

9月1日（月）	異文化をどう理解するか —モダンの原風景としてのパリをめぐって— 21世紀の世界秩序を求めて	三好 郁朗 教授 中西 輝政 教授
9月2日（火）	教授職人論の立場からみた国際感覚と地域感覚 世界におけるアジア経済 —その特殊性と普遍性—	竹安 邦夫 教授 間宮 陽介 教授 (大学院人間・環境学研究科)
9月3日（水）	ノーベル文学賞の二人 —大江健三郎とシェイマス・ヒーニー— 夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ	村形 明子 教授 宮本 盛太郎教授

- ◆ 時 間 午後1時～5時10分
- ◆ 場 所 京都大学大学院人間・環境学研究科地階大講義室
- ◆ 受講資格 特に問いません
- ◆ 受講料 6,400円（消費税を含む）
- ◆ 定 員 120名（先着順）
- ◆ 申込方法 官製往復ハガキにて、郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記入し、返信用に郵便番号、住所、氏名を記入のうえお申込みください。申込みは先着順により、同ハガキにて受講通知（受講料払込み通知）をしますので、所定の期日までに受講料を払込みください。
- ◆ 申込締切日 平成9年8月4日（月）

問い合わせ及び申込先 〒606-01 京都市左京区吉田二本松町
京都大学総合人間学部庶務掛「公開講座」係宛
電話 075-753-6536

話題

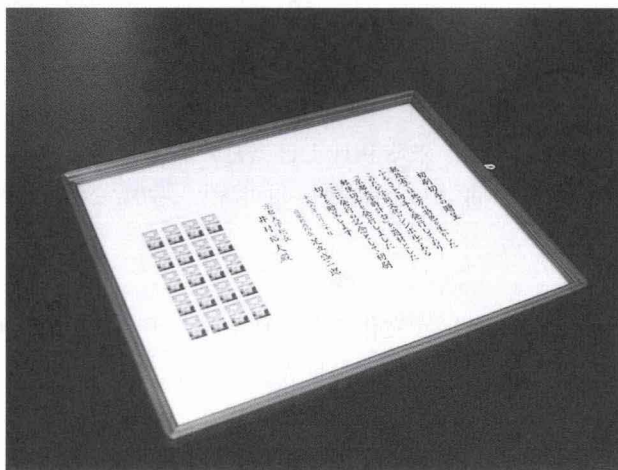
ふるさと切手「京都大学時計台」の発行について

平成9年6月18日、ふるさと切手「京都大学時計台」が発行された。

この切手は、京都大学が創立百周年を迎えることから、古都京都における学術・文化のふるさとと言える京都大学のシンボル「時計台」を題材として、本学の創立記念日に発行されたものである。

切手の原画は、奥田元宋画伯の筆によるもので、奥田画伯は、日本芸術院第一部（美術）部長を務める日本画の大家であり、昭和59年には文化勲章を受賞されている。この切手の構図は、新しい世紀へ歩み出す京都大学をイメージし、時計台の背景に希望に満ちた茜色の空を配して制作されたものである。

また、6月20日には、ふるさと切手「京都大学時



計台」の発行を記念して、足立盛二郎近畿郵政局長から井村裕夫総長に対し初刷切手が贈呈された。

第36回国立七大学総合体育大会の壮行会について

6月25日（水）12時10分から時計台前において、第36回国立七大学総合体育大会の壮行会が開催された。

壮行会は、毎年この時期に、京大体育会が京大関係者を招き、総合体育大会への参加選手を激励するために行うもので、今年も体育会所属の48運動部の学生や一般学生、教職員が多数出席した。

井村裕夫総長、宮崎昭学生部長及び池永満生体育会会長から、それぞれ激励のことばがあり、それに応え、参加選手を代表してアーチェリー部の選手が力強く選手宣誓を行った。応援団・チアリーダー

による演舞も披露され、教職員や一般学生などの声援をうけ、壮行会は盛会のうちに終了した。

また、同日、17時30分から吉田食堂1階フォンテにおいて行われたレセプションでは、選手が健闘を誓い合った。

なお、この総合体育大会は、1962（昭和37）年から旧七帝国大学体育会の主催の輪番制により開催されているものである。今年は7月19日（土）の開会式をはさみ、約1ヶ月にわたり、北海道大学の主管で、26種目の競技で熱戦が展開される。

（学生部）